

没後 25 年記念 東山魁夷と日本の夏

山種美術館（広尾） 24. 07. 20～09. 23



「東山魁夷」(1903～1999)は、四季を通じて自然との対話を重ねさまざまな風景を描いた画伯で、特に海山の自然から古都の町並みにいたるまで詩情豊かに表された作品は、没後四半世紀を経た現在も多くの人々から愛されている。なかでも注目すべきは、普遍的な日本の海のイメージと伝統的な日本の絵画の装飾性が融合した、《満ち来る潮》(チラシ図)の大作である。

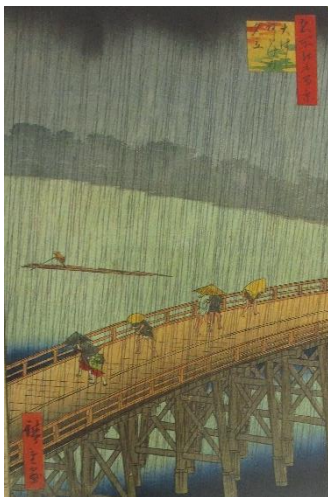
本展では、白波の立つダイナミックな海原を表現したこの作品を筆頭に、当館が所蔵する「魁夷」の全作品を公開し、さらに、日本の海と銀色の月を描いた「横山大観」の《夏の海》、青い浴衣姿の女性の一瞬のたたずまいを捉えた「松村松園」の《蛭》などが展示されていて見応えがある。



松村松園 《蛭》 木版版画 1983年

浴衣姿の美人が、蚊帳の釣り手を持ったまま飛び込んできた「蛭」に見とれている姿を描いた情景は、艶めいて挑発的な画風になりがちなところを、清々しい情趣にまとめあげられた作品であるとされる。

浴衣の青地に紺色に描かれた大胆な百合模様と、白い鹿の子絞りに夏の冷感に、着物の美しさが存分に示されていて、体の線の描き方も気にならない。顔の優しげな甘美表現は、この時期の作者様式といえるものである。



歌川広重 《名所江戸百景 大はしたけの夕立》

「大はし」とは、両国橋の下降に架けられた橋のことである。墨田川にかかる大橋近くに幕府御舟蔵があり、これを遠景として手前にそば濡れる橋の情景が描かれて、川岸や橋が作るジグザグの線が画面を左右に横断している。空の部分には、摺師による「当てなしぼかし」によって渋黒の雨雲が見事に表現されている。この機智に富んだ構図は、巨匠「ゴッホ」が油彩画を模写したことから、世界的にも著名な「錦絵」となっている名高い作品である。

